一生懸命な姿は伝わる

完璧な子育てはない

今子育てに悩まれている保護者の多くは、とても一生懸命だという印象を持つ。うまくいく、いかないは別にして、その姿勢は素晴らしいと思う。自己満足ではいけないという人もいるが、一生懸命な姿はきっと子どもたちに伝わるものだ。

これは保育でも同じで、周りの目を気にしながら保育している時は、子どもたちはどこか「のり」が悪く、そんなことを考える余裕もないほど遊びに夢中になっている時は、「面白かったね」と子どもたちからうれしい言葉が返ってくる。結果を求めず、見返りを求めない時に良い結果が出る。子育てを通じて、大人がいろいろなことを思い出したり、気付いたり、再確認したりできることが大切なことで大人も育つのだ。

その子育てで保護者を悩ませている原因の一つが、完璧さを求めてしまう傾向にあると思っている。完璧さというよりも効率的・無駄のない子育てという方が伝わりやすいかもしれない。人がかかわることで完璧なことなんて絶対にない。何故なら価値観が違うのだから、同じことをしてみんなに評価されることは絶対にない。「みんな違うということ」を認めることから始めていく必要があり、これは子どもたちにとって、「僕はこのままでいいのだ」という安心した気持ちにつながると考えられる。これは、幼稚園の先生も同じでいろいろな先生がいる。確かにスーパーでマルチな先生になってくれればよいが、それはやはり無理というもので、先生にも得意分野がそれぞれあり、そこをまず認めてほしい。

体を使った遊びの得意な先生がいる、何かを作るのが上手な先生がいる、子どもたちとの距離の取り方がとても上手な先生がいる、いろいろなことをよく覚えていてその子の成長の過程をしっかり把握してくれる先生がいる、それぞれが良いと思ってほしいとつくづく感じる。そう思ってもらえると、先生方も伸び伸びとしてくるものだ。尊敬する先生が教えてくださった「ノーバディーズパーフェクト」つまり、完璧な人はいないという言葉は子育てに悩まれている方に送りたい言葉の一つだ。

（柿原　勝）

かきはら・まさる　釧路短期大学附属幼稚園園長、釧路市私立幼稚園連合会事務局長、釧路市在住

2011年1月18日

老論（こうろん）

できることを褒める

子育ては足し算の発想で

「子どもたちに声を掛ける際に、足し算の発想で声を掛け、見守っていくのが良いですね」と、ある大学の先生から聞きました。本当にその通りだと思います。例えば「まだできないの？」と「あら、昨日より上手になってるわね！」は同じ場面での声掛けなのです。

「できる」を軸に考えると、できないことは減点（引き算）。その子の成長過程を認め、良くなっているところを褒めていくのは足し算なのです。子どもたちは「今」を一生懸命生きているのだから、まずそこを褒めて、認めてほしいと強く思うのです。子どもたちは、経験を積み重ねていくことで、考えが広がったり、深まっていくものです。だからこそ、経験をさせることが大切です。失敗すると分かっていても、大人たちは時には黙って見守ってほしいのです。

大人たちは軽い気持ちで「ほら、やっぱり!!」と言っているかもしれないですが、失敗を指摘され続けたら、子どもたちは「失敗はダメなことなんだ」と思ってしまう。その延長には「失敗しないよう、失敗しないように」と萎縮した小さな人間になってしまう危険性があるのです。

『失敗は成功のもと』の発想が大切です。失敗したり、負けたりした経験が多い人ほど、長い目でみたら、大きな人間になっていけると思うのです。つらさや悔しさを知っているからこそ、人に優しくできると思います。そのためには、幼児期に失敗を受け止めてもらった経験も必要となってきます。

足し算の発想で子育てを実行するには、「良いとこ探し」をすることが一番だと僕は思っています。人の悪いところや欠点はすぐに見つけることができても、良いところはなかなか見つけられないものです。僕自身もそうで、ついつい子どもたちを注意ばかりしてしまいます。

でも、子どもたちの長所を見つけることは実は難しいことではなく、大人の側の発想の転換なのです。精神科医の佐々木正美先生は、ある本の中で「長所のない人間はいない」とまで言い切っています。多くの子どもたちと接してきて、本当にその通りだとつくづく思うのです。

（柿原　勝）

かきはら・まさる　釧路短期大学附属幼稚園園長、釧路市私立幼稚園連合会事務局長、釧路市在住

2011年12月26日